

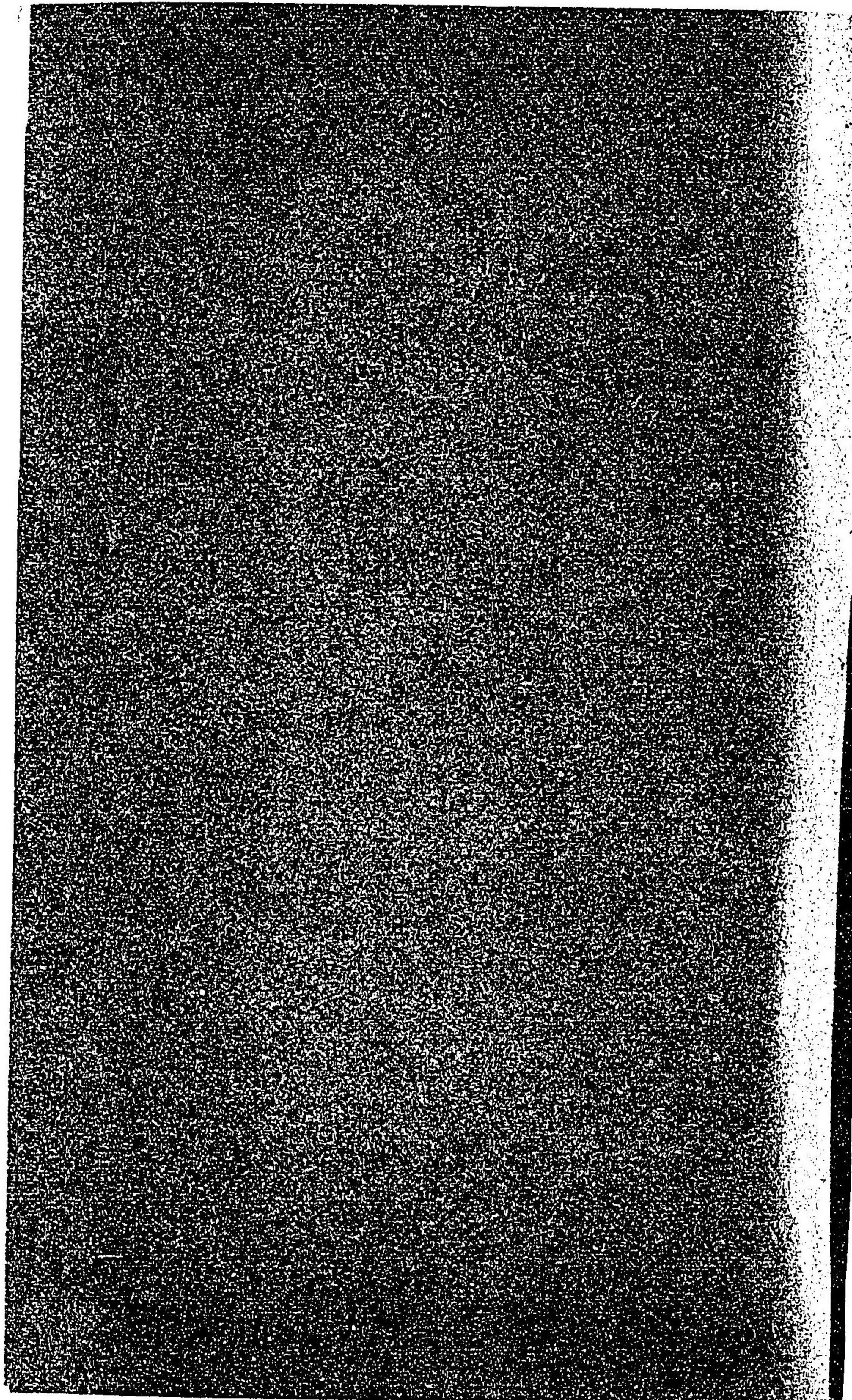
特 44

261

聖  
經  
大  
鑑

259

177



琵琶歌大鑑

◎吟者心得

●薩摩琵琶を誦はんと欲せば先づ第一に精神を静め其の姿勢を正しくし熱心を旨とすべし

●歌譜は其の歌意に従ひ自然の譜を貴び喜怒哀樂を感別せしむる様發音すべ即ちかなしき事を歌ふ場合には自ら其悲境に在る如く悲哀に吟じ又勇壯な事を吟ずる場合には身自から戰場にある如く活潑に歌ふべし

●聲は口先にて美音を發せんよりばむしろ腹中より清き高尚なる音聲を發するに勉むべきなり

●初學者の爲めに左に歌曲の符號を示す

△ 切り 大聲に歌ふ ○ 大かかん 極めて大聲に

● 中かかん 少しく低く 〵 吟替 悲しき聲にて

◎ 崩れ 緩急の度を失ふべからず

明 込  
4 4 1  
内 交

琵琶歌大鑑

○金剛石

金剛石も磨かずば玉の光りは添はざらむ人も學びて後にこそ切り「まことの徳は顯はるれ」大かんに時計の針の絶間なくめぐるが如く時の間も日影惜みて勵みなば如何なる業か成らざらん「水は器に隨ひて其さま／＼に成りぬなり人は交はる友により切り」善きに悪しきに移るなり「己にまさる善き友を選び求めて諸共にこゝろの駒に鞭うちて切り」學びの道に進めかし」

○春日野

春日野に下萌へ出づる若草の歳の戸あけて秋津國霞わたれる片岡に切り「月は残りて

○國船

雉子鳴く「大かんに明けの友鶴君が代の壽祝く初聲に南山の榮へ久しく松竹の」落ち葉掻きとる諸人の遊ぶ小川の菊のつゆ流もにはふ五百歳の齡を國にゆづる葉の切り「朝日がいやく富士の嶺」これを蓬萊とは謠ひつゝ七寶の嶺は影を湖水に涵し木々の梢も荒磯の大かんに月海上に浮びては兔も走る浪の上縁樹影沈みては魚木にのぼる風情かな「五風十雨の御代の春切り」四海になびく時つ風「君が治むる御代なればいく萬代までも切り」かはらぬ御代こそ目出度けれ」

雲に登ゆる高山も登らばなどか越ざらぬ空を浸せる海原も渡らば切り「終に渡るべし」大かんに「我蜻蛉洲は茜さす」東の海の離しま例は海の只中に浮べる船にさも似たり二萬方里の船の中四千餘萬の乗組あり船の主の指揮を受け文明海に進みゆく水主楫取多かるに我等も楫取の一人なり船のゆく手は和田の原八重の沙路の遠ければ颯

琵琶歌大鑑

さかまく折もあり切り「高浪荒る、時もあり」船手の業に習はずば追手高浪凌ぎ得て思ふ切り「港にいかで着くべき」

○月 花

月と花とは昔より誰れもぬ人やある誰れ喜ばぬ人かある左は去りながら月花も心につれて憂ごとの切り種となれるも多からん「大かん」足柄山の松風に吹き合せたる簫の音も「是より遠く奥州へ軍と云へば身の末は死るか生るか白河の關をば雲やへだつらん勿來の關の春の暮駒をといめて詠むれば都の空は花曇り鏡の袖に散りかゝる櫻の雪は將軍の中かん「鬢の霜より尙白し」戟の枕に夜は馴れて秋の哀も知らざれど越山の月のいと白く雲間を渡る雁がねの故郷の空に歸るぞと思へば我も懐かしや大かん「花の都は荒れ果て、」何處が我身の置き所今宵一夜の宿頼む櫻の露に袖濡れて滅亡時に極りし平家の末こそ悲しけれ佞人の讒により詔の言葉容れられず吟聲

琵琶歌大鑑

二人ともなき賢人は「筑紫の浦の詫住ひ御衣を拜て涙なる心の内は如何ならん我君今は賊のため遠き島路に行給ふ無念の心やるせなく十字をしるす櫻の木我亦心を申さんに中かん「など他言を要すべき」月の光や花の香は幾萬年を経とても更に替りはなきなるに中かん「常なきものは世の治亂」月を見て酔ひ花を見て眠る春の手枕の只一筋の夢の間に移る興廢存亡の中かん「世の成行ぞ無常なれ」若も世運の拙なくて上には君を煩はし下には民に苦勞させ大かん「國の亂る、其時は」月の光は輝くも花の色香は匂ふとも中かん「など樂みのあるべきぞ」されば世間の諸人よ赤心引おこし國の光を東洲の月より尙輝し國の譽をみよし野の花よりも尙芳しく切り「するこそ今の勤なれ」誓て斯くもなせし後月を見るこそ樂しけれ切り「花を見るこそ樂けれ」

○潯 陽 江

紅葉うつろひあしが改る秋の哀れもいと深き潯陽江の夕まぐれ友の船出を送り來て

琵琶歌大鑑

切り別れをおしむ盃の「大かん」敷重なれど糸竹の「調」もそわん淋しさに本意なき事  
と思ひつゝ影遠白き浪の上に月打守る折しもあれたちまち聞ふゆる琵琶の聲思ひも  
かけぬ事なれば互に心ときめきて歸らん事も行く事も忘れ果てつゝ其聲を尋ねて誰  
ぞとおとなへば打ひそまりて答なし船こぎ寄せて酒をさへ燈かゝげ又更に宴のむし  
ろ打開き琵琶の主を招けども頼には出で来ず百千度呼び立てられてしぶくゝに此方の  
船に移り來ぬ琵琶を抱きてまばゆけに面を負ひ弾き初し中かん其搔音に云ひ知らぬ  
深き情の籠りつゝ「彈行儘に常々の己が心のうれたさを訴へ出る心地せり人こそ知  
らぬ濱ゆうの百重重なる浮き思積る恨の數々を四筋の糸にいはすらん軽くうち寛く  
捻り拂ひつかかげつ初めにはげいしようを奏で後には六ようを弾しけり

大絃嘈々如村雨

小絃切々似私語

切々嘈々錯雜彈

大球小珠落玉盤

問關鶯聲花蔭滑

幽咽泉流水下灘

水泉冷澁の趣こりて糸をたへ暫し聲なき其程はそいろにうれいを催して聲あるより

琵琶歌大鑑

も中々に風情を添へし折しもあれ忽ち響く搔の音銀瓶くだけで水迸しり大かん「軍起  
りて打物のしのぎを削るにさも似たり」曲もいまわとなりし時搔を納て四ツの緒を  
只一せいにかきなせばさながら絹をさく如し東の船も西なるも只悄然と聞きとれて  
物云ふ人もあらばこそ秋の浦風身にしみて水底白く澄み渡り切つ月の影こそ更けに  
けり「衣を装ひ居なほりて語る言葉もくごもりて中かん妾も本は都なるがまの凌下  
の生れにて」十三歳の頃よりも琵琶の上手と代に知られ玉を飾れる宮の内黄金を敷  
ける臺にも召上られてみやびをの彼方此方の會にも招ぎよせられたわれあいさいめ  
さかわし綾錦かつぎ歸れば家も富み身も榮へつゝ代の中はかくある者と愚にも思ひ  
頼みて花の春吟聲紅葉の秋と等閑に日を経るからに同胞に親族に離れ夕行き朝來り  
て顔花の盛りもいつか過ぎの門馬も車も寄り來ねば代渡るたすき盡き果て身を浮草  
の根をば絶へ「水のまに／＼さそわれて情も淺き商人を夫とするだに悲しきを其夫  
遠く旅立し中かん「此浦船に夜を守る」月明に水寒し更行くまゝにまどろめば我が身  
の盛り夢に見ていと悲しき増さりぬと語るを聞ひて思はずもフトキ　いきつく

く琵琶を聞くだにかなしきを此物語の哀れさよ初めて逢へる其人と身の際こそ  
はかわれども我も同く浮沈み去年より此處へさすらへて中かん「潯陽城の片ほとり」  
芦と竹との生茂る汚き中に家居して朝夕に聞くものは高根のましらはとぎす樵  
夫の歌や揚卷が吹きなす笛の音計り却て胸を痛めつゝ昔聞きつる糸竹の音なつかし  
く思ひしに今よいの君が琵琶の音は天つ乙女の音楽を聞く心地していと嬉しいなむ  
事なく今一ツ弾ひて聞かせよ我も又歌を作りて送らんと云へば實もと思ひけん又も  
弾きなす搔音は切り「前の聲よりいそがしく」物すごければ江洲の司馬は更なり並み  
居たる切り「人も袖をぞしぼりける」

○蓬萊山

目出度やな君が恵の久方の光り長閑き春の日に不老門を立出で、四方の景色を  
詠むれば大かん「峯の小松に雛鶴住みて」谷の小川に龜遊ぶ君が代は千代に八千代に

磊の巖となりて苔の結まで命ながらへ雨塊を破らす風枝を鳴らさしと言へば又琵琶  
舞の御代も斯くあらん筒程治まる御代なれば千草萬木花咲實る五穀成就して上には  
金殿樓閣の夢を並べ下には民の窻を厚して仁義正敷御代の春蓬萊山とは是とかや君  
が代の千歳の松は常盤色變らぬ御代の例には天長地久と國も豊かに治まりて弓は袋  
に切り「劔は箱に納め置く」諫鼓苔深ふして鳥も中々切り「驚く様ぞなかりける」

○勿來の關

前九後三の戦場に功名たてし君が威は中かん「北は奥州外ヶ濱一南は遠く白河の關の  
街方に至るまで切り「知らぬ者こそなかりけり」大かん「一年勿來の關に来て」中かん「  
駒を止めて故郷の山を遙かに眺め見る君が心の遣る瀬なく」頃は彌生の花盛り何處  
も同じ春景色中かん「君が頭の白髪も君が戦の白旗も」關の櫻と諸共に中かん「花とば  
かりに見えにけり花は散れども君が名は一度向を止めしより」口吟にも皆人の切り」

言はぬ者こそなかりけり

○武藏野

武藏野に草は種々多けれど摘菜にすれば借も少し皆人は若き時より唯切り徒に日を  
送り大かんに才智藝能無き人は寶の山に入りながら空しく歸るが如くなり偶々此  
世に生れ来て眞如の珠を踏かずば中かんに人と生れし甲斐もなし只人よりは淺く思  
はれて犬の年老る如くにて中かんに朽ち果つること無念なれ又いつの世のいつの  
時にかみがく可き頼まれぬ世にもあるかな月鼠戦ぐ草葉の露の身なれ共假令高位長  
者の身となりて七珍萬寶滿々て榮華に驕る樂も切り一夜の夢の如くなり歎樂極ま  
りて哀情多しと古人の文にも記さるゝさればにや大かんに生々世々の樂も心の  
中  
の  
月  
や  
花  
是  
を  
樂  
む  
人  
も  
な  
し  
會  
者  
定  
離  
盛  
者  
必  
滅  
の  
世  
の  
習  
春  
去  
り  
秋  
は  
蟬  
の  
聲  
中  
か  
ん  
扱  
も  
墓  
な  
き  
浮  
世  
か  
な  
引  
寄  
せ  
て  
結  
べ  
ば  
草  
の  
庵  
に  
て  
切  
り  
解  
く  
れ  
ば  
元  
の  
野  
原  
な  
り  
少  
し  
き  
を  
足  
れ

りとも知れ滿ちぬれば月も程なく缺けて行く十六夜の空や切り人の身の上と知られ  
たり

○菅公

靈ちはふ神代うるけさいにしへに穗日の命と申しは日の大神の御言もち此葦原の  
國形見切り神のさやぎを撫で鎮め大かんに天津日繼の御爲に高き功をあらはせり  
又玉垣の宮の御代野見のすくねといひけるは殉死の風を止めむとおもほしめし天皇  
の大御慮を輔けつるうべなりけりな其裔の菅原氏は代々を経て學者も多く功臣もす  
くなからざる其中に道眞公と聞えしは學識博く才深く忠良無比の人なるをかしこき  
宇多の天皇は中かんに深く頼みにおほしめし藤氏の權をおさへむと右大臣まで舉給  
ひなは進むべき身の榮へあはれ花には嵐あり月には雲のならひにて延喜の御代の  
明らけき光りもおほふ中空の雨のぬれ衣ほすよしも泣きて訴へし言葉に法皇これを



琵琶歌大鑑

と、めんと中かん「出ます道もさへざられ」遂に太宰の權の帥男女御子達二十餘人も  
ちり／＼に流されたもうぞいたはしき折しも春の梅の花それも露にやしめりけん  
はとこれを御覽じて

東風ふかばにはひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘ぞ

聞きてかうべをたれも皆中かん「涙にこそはむせびけめ」かくて配所の太宰府に吟聲「  
うき年月を経たまへど」たゞ謹慎の御心に纒に見るは都府樓の瓦の色の外はなく「  
たゞ聞くものは観音寺鐘の聲のみさやかなり又あるときは山わかれ飛ひゆく雲のか  
へりくる空に望みをかけたまひまたあるときはそのかみの御宴の事を思ひ出で

去年今夜侍ニ清涼ニ

秋思ノ詩篇獨リ斷腸

恩賜ノ御衣猶在以此ニ

捧持ニ毎日拜ニ餘香ニ

これらの詩歌を味へば朝廷をうらむ御心の中かん「あらざりけるは明らけし」さるを  
雷火となりわたり落ちぬといふはいかならん菅根の朝臣時平公うたれて死せりとい  
ふはなほ世の應報の理に中かん「いひ傳へたる説ならん」心つくしの沖つ浪かへらん

琵琶歌大鑑

時も俟得すてくもりがちなる秋の夜の長き思ひの末つひにかたぶく月に空遠く雲か  
くれしは惜しけれど中かん「誠忠なんぞうづもれん」太政大臣正一位天滿宮と仰か  
れて宰府北野の神垣はいよ／＼高く世に榮へ又水ぐきのあと清く切り「流れ／＼て海  
山の」末の末迄御社のあらぬ里なく心なきひなの童のたぐひまで手習ふ時のはじめ  
より切り「尊ぶ神とぞなりにける」

○小督

頃しも秋の半の空詠めがちなる御袖の涙の露を拂はせ給ひ宿直に侍ふ彈正の大將仲  
國を召され如何に仲國切り「小督の行衛を知りたるか」大かん「内裏を逃れ出しより」  
嗟峨の邊に聊かの知己便りてあると聞く汝如何にもして尋ね出で此文傳へよとの仰  
せなり仲國畏まり唯嗟峨の邊と計りにて主人の名をだに知らざれば尋ねむ様はなけ  
れども小督の殿は世に知られたる琴の上手に在すれば今宵最中の月影に君の御上思

し出一曲調へ給はん事よもあらじ兎にも角にも尋ね出參らせて寂慮を安め奉らんと  
心に思ひ定めつゝ畏まりぬと聞へあげ直に御前をまかり立寮の御馬に打乗りて  
中かん隈なき月に鞭を揚げををじかなく此山里と詠じけん嵯峨野の奥に分け入れば  
閃き渡る白露に尾花が袖も打濕り鳴きかわしたる虫の音に浮世の善悪も思れて獨心  
を痛めつゝ家ある毎に立寄りて切り問へど知るもの更になし如何はせんと駒を立  
只茫然とありつるが若し寶林寺にや在すらん龜山近く到りしに中かんしづがき遙に  
聞へけり「峯の嵐か松風か尋ぬる君か琴の音かとめつゝ行けば一村の松の影なる片  
折戸中に聞ふるつま音を手綱緩べて孰々と聞けば誠や月花の御遊のむしろに侍りて  
御笛つかうまつりし時聴覺へつる調にて殊更曲は想夫戀は紛れもあらじとて腰よ  
り用笛脱出し少し計り吹き鳴らし頓て駒より飛降り門をほとと叩きこれは仲國  
大かん内裏より御使に参りたり」開けさせ給へくと訪ふに琴彈差し静まり却て音  
もなし稍やありていたひけしたる小女房門をほそめに明けながら顔計り差出し怪の  
賤が伏せやに内裏より御使など玉はるべきに非ず門違ひにや御在すらん仲國は生ま

じいに依頼しては門さゝれんと思ひければ是非なく押して内へ入り妻戸の縁に進み  
寄り何進斯る處に御渡候ぞ君には明暮思沈ませ玉ひつや〜供御も聞し召さず打解  
御寢もならせ給はず御命さへほと〜御覺束なうこそ見へ玉へり斯く申さばうはの  
空にや御在すらんと御消息を参らすれば吟登あらなつかしの雲井やと御文顔にあ  
て給ひ暫し言葉も涙の雨に晴たな月も曇るらん「仲國も座にせき來る涙を押へ兎角  
慰め参らせつゝ表の衣絞る計りになりにける稍やありて御かへり事引結び女房の裝  
束一重ね取揃へ給ひければ肩に懸け君には左こそ待わびてをはすらん重ねて御迎ひ  
には参るべし待たせ玉へと言捨て、切り「駒を早めて立歸り」ありし次第を残りなく  
奏する程にはのほのと秋の長夜も明けにけり切り「秋の長夜も明けにけり」

○櫻狩

霞棚引やま〜のさかりの花を詠むといなく駒に鞍おかせ東雲近く麻茅生の切り

芝の庵を只ひとり」大かゝねぐら放れしうぐひすの」聲を聞つ、春の野に萌る草葉の露わけてすゝむる駒のたてがみにみだれかゝれる青柳の糸を傳ふて朝風に吹ともなしにゆかし香をおくりてわれをさそふかと思ふばかりに遠近の梢は雪か白雲か景色妙なる其さまにうき世の善悪も打忘れしはし木陰に立よりて矢たての筆をとりあへず

薄命能伸旬日壽、納言姓字胃一斯花、零丁借宿平忠度、吟詠恨風源義家、

志賀浦荒飜三暖雪、奈良都古簇三香霞、南朝天子今何在、欲望三芳山一路更賒

とかきつゝけたる水莖を跡に残して花の香を風のまに／＼とめくればこゝは盛をはやすぎてちりしく花は野に畑に飛かふ蝶の如くなり吟替、嗚呼世の中はうば玉の夢かうつゝかきのふまで榮えしもの、けふは早見る影もなく成り果てうき世の中とかちつゝ今更それとゆふぐれの鐘の音さへ身にしみて昔をし、のぶ人もあらむ」左は去ながら花の木も又こむ春にめぐりあひまづしき人もいつまでか時めく時のなからめや榮枯盛衰は世の習ひ只玉銚の道理を切りたどらむ外はなかりけり一いざ歸らむと

乗る駒の手綱かひくる其袖に花のふいきはかゝりけり花の切りふいきはかゝりけり

○俊寛

初段

あだまもる筑紫のはての薩摩海鬼界が島のあら磯に治承元年夏五月切り流され玉ひし人々は」大かゝ右近衛の少將成経」檢非違使平の入道康頼法勝寺の執行俊寛僧都の三人なりうき艱難を此島に送り玉ふ其うちに大赦の令をぞ傳へらる思ひもかけぬことなればあらありがたき御詔やと三人ひとしくひざまづきうやくしくも令状を押戴きて成経はうれし涙に袖ぬれて聲もふるへてさら／＼と讀得玉はぬ形勢を康頼取りてやう／＼によみあけたまふ趣きは大かゝこのたび中宮御産の御祈禱に」非常の大赦行はるゝにより鬼界が島流人のうち成経康頼を赦免すと讀上げ給へば俊寛あ

琵琶歌大鑑

つと驚きかしらを揚何とて某が名を讀落し給ふぞと言葉せはしく問給へば康頼も打驚きて聲うるみ實にいぶかしきことなれど御名は更に見え侍らず俊寛聞て扱は筆者のあやまりか今ひとたびよませ給へとありけるを使の元康すゝより 中かん「某都にて承り候も」成経康頼のふたりは御供いたせ俊寛一人は此島に残せ申せとの御事なり嗚呼こは如何に何事ぞ罪も同じく配所も同じ非常も同じ大赦なるに獨り誓ひのあみにもれ沈むは何の因果ぞや吟鶯けふまでは三人一所にありてすらさもおそろしくすさまじき荒磯島に只ひとり離れて海士の捨草の浪のもくづにあらねどもよるべもしらぬうき身やと歎くにかひもなきさなる千鳥と共に鳴ばかり「思ひにあまる俊寛はさきに讀たる卷物をいくたびとなく打開きあとりかへし見給へど成経康頼とあるばかりにて僧都とも俊寛ともかける文字は更になしこは又夢かまぼろしか夢ならばさめよ〜とのたまひて獨り涙にくれたまふ

玉兔晝眠雲母地

金鶏夜宿不萌枝

寒蟬抱古木

鳴盡不回頭

琵琶歌大鑑

といふ詩の心はよくも俊寛僧都の身の上と切り「今こそ思ひしられけれ」

二段

去程に時刻うつりてかなはじと楫子の言葉にせかれ來て名殘は更につきねども成経は夜の衾を康頼は法華經一卷を切り「各かた見に残し置き大かん」さまぐなぐさめ參らせて「船にのらむとし給ふを俊寛袂にすがりつゝ元康聲をあらゝげ僧都は叶ふまじといひ放つ嗚呼うたでやな公の私といふことあればせめてむかひの地なりとも情にのせてつれ給へと涙を袖につゝみかねのたまふ聲の終らぬに哀れや無情の楫子どもは櫓楫を振揚うたむとす俊寛今は叶はじとや思ひけむすがる袂の手を放ち一時は宿へ歸らむと踵はあとへかへせどもかへらむものは心にて船子の無情も元康の怒る言葉も打忘れまた立寄りて出船のつなにとり付引とむる船子ども綱をおしきつて船をふかみに押いだすせむかた浪にをどりこみ船よ〜と呼はれどかへす模様もあらざればちから及ず俊寛はもとの渚にひれふしてぎん鶯彼の松浦さよ姫の歎きもわれに及ばじと悲しみ玉ふもあはれなり時を感じては花にも涙をそゝぎ別れをおし

みては鳥にも心を動かすといふことあれば人としてながき別れの悲しみをしらぬものこそなかるらめ「されば成経も康頼も涙ながらにさし招きわれら都にのぼりなば善やうに取りなしてやがて御迎に参るべし心強く待たせ玉へと宣ふ聲のかすかなるたのみを濱のまつかげに聞やいかなとゆふ浪のよするまに〜俊寛は只手を合せ頼むぞと呼はる聲も呼聲も切り次第〜に遠ざかる船もかすかに人かげも消えて見えなく成にけり消て 切「見えなくなりけり」

○吉野落

みよし野の花も立田の紅葉も夜半の嵐に誘はれてあだに散りゆく時は又切り増て哀れに思ふなり」大かゝ茲に二階堂出羽の入道道蘊は「元弘三年正月に六萬餘騎を従がへて大塔の宮の日頃より籠らせ玉ふ大和なる吉野の城へぞ攻めよする菜摘川のほとりより吉野の方を見上れば白旗赤旗錦の旗御山卸に打靡びき雲か花かとあやしま

れ麓には敵の大軍すき間なく甲のほしを輝し鎧の袖を連ねしは錦を敷くに異ならず峯高して道細く山けわしくして苦なめらかなり幾千萬の精兵が必死に成て攻むるとも漸く落つべしとも思ほはずかゝる處に崩れ同じく十八日卯の刻より兩陣吐氣をドツト揚げ敵攻上れば攻下し互に勇氣をふるひつゝ此處の谷彼處の峯に馳せ上り攻め合闘き合射手を揃へて散々に射立たれど寄せ手の勢は皆命を知らぬ坂東武士親打たれても顧みず主倒れても取合はず骸を乗越へ々々七日が間息をも續かず攻め戦ふ血は草芥を染め屍ねは路頭に横たはるかゝる處に敵の案内者岩菊丸は足輕共に下知をなし金峯山の險を越へ木の根岩角よち登り在々所々に火を掛けて吐氣を作て攻めければ城兵も今は前後の敵を防ぎ兼自害する者もあれば猛火の中へはせ入て死するもあむり向ふ敵と引組んで打死する者もあれば宮に注進する者もあり大手の堀はたちまちに死骸を以て埋めたり」宮は此由聞し召し緋おどしの御鎧に龍頭の甲を召させられ三尺五寸の小薙刀を脇にはさみ屈竟の兵共崩れ廿餘人前後左右に引き玉ひ面も振らず切て入り砂子を飛し煙を立て東西を打拂ひ南北へ追廻し爰を詮度と戦ひ給へ

ば寄手の勢も此廿餘人に切り立られて風に木の葉の散る如く四方へサツト散りにける。宮は是より藏王堂の大廣間にゆうくと引き上げ玉ひて軍兵と最後の御酒宴をぞ召されける此戦に宮の召たる御鎧は七筋の矢に貫ぬかれほふ先きと二のうでに二ヶ所の突き傷負はせ玉へと立たる其矢をも抜がせ給はず流るゝ血潮も拭はせ玉はず敷皮の上に立ながら大盃を三度迄傾け玉へば木寺の和摸四尺三寸の太刀先に敵の首をさし通し大かんに聲高かに謠ふ様「戈戰劔戟を降す事電光の如く盤若山岩を飛掛急雨の如しと雖天帝の身にはちかまらず却て修羅彼が爲に破らるゝと太刀振りかざし舞ひたるは彼の漢楚の鴻門に楚の項伯と項莊と劍を抜て舞ひし時樊會庭に立ちながら幕をかへげて項王をにらみし勢も切りかくやと思ふ計りなり」

二段

去程に村上彦四郎義光は殊にはげ敷戦ひし故敵に矢十六筋を射つけられの中の節や袖摺の節より折れて立たるは枯野に残る玉萩の切り風に靡びくが如くなり大かんに立たる其矢をも抜ぐに暇なく「宮の御前にひれ伏て一の木戸は早破れ今二の木戸にて

支ふれど連日の戦に軍兵共は皆打死し逆も籠城覺束なし敵四方を圍まん其内に早く落させ玉ふべし臣は恐れ多き事ながら召させられたる直垂や御物の具を頂載し御諱をもおかし參らせて茲にて戦死を仕らんと忠義面に顯はれいと懇ろに申上れば宮は哀れに召し如何でか去事のあるべきぞ死なば處を替へずして中々吉野の山に聲ばしき名を残さんとたまへば「義光これを聞きも敢ず嗚呼淺間敵仰かな昔漢の高祖が荊陽に圍まれしとき紀信高祖が眞似をなし楚を欺むかんと乞ひたりしに高祖はこれを救したりこれ等の御覺悟あらせられずしてよくも天下の大事を思し立たれたり早御物の具下し賜はれと御鎧の上帯解き奉れば宮は實にやと思しけん御鎧も直垂も切りぬがせ給ひて義光に手づから渡しの玉ふ様我若し生き延びたらば汝が後生を吊ろはん若又打死したらば同じ冥土に伴ふべし是今生の別れぞと」言葉すくなくのたまひて涙ながらに落させ玉ふ義光もせき来る涙をおさへ兼木戸のやぐらに馳せ上り大音揚げて名乗る様大かんに我はこれ神武天皇より九十六代の孫「今の帝の第三の皇子一品兵部卿尊仁なり逆臣ばらに惱まされ恨を泉下に報ひんため只今自害す

琵琶歌大鑑

る所なりこれを見て汝等が身に供へたる武運つき腹を切ん其時の手本にせよと叫は  
りて鎧をぬひて投げ落し赤地の直垂に練貫のふたへ小袖を引寛ろげもろはだぬひて  
一刀を大ッん左の腹へグット立」眞一文字に引廻しあけに染みたるはらわたを櫓の  
板に投げつけて大刀先きくわへうつ伏しに伏して果たる義光が最後の様こそ勇まし  
けれ敵兵これを見て大塔の宮は御自害召さたり御首たまわらんと云ふ儘に四方の圍  
を打ち捨て櫓の下に馴せ集る宮はこれと引違ひ天の河へと崩れ落ちさせ玉ふに敵五  
百余騎道を遮ぎりければ義光の一子村上兵衛藏人義隆は父の致へに従ひて一人茲に  
踏止まり追ひ来る敵の馬の諸ひさ進きては切すへ平くび打ては刎ね落し右へ突きの  
け左へ倒し飛蝶の如く飛び廻り猛虎の如くたけりたて九折なる細道に敵五百餘騎  
を引き受けて半時斗戦ひしが如何に義隆剛の者とは云へ其身鐵石にあらざれば」深  
手の矢創十余ヶ所淺手の創は數知れず今は是迄とや思ひけんとある竹村に馳せ入て  
腹十文字かき切て朝の露とぞ消へにけるやうく此隙に宮は虎口を逃れ高野山へ落  
ちのび玉ひしは村上父子がみよし野の切り花と散りにし其いさを」立田の秋のもろ

ち葉の赤き心に依るとかや赤き切り心によるとかや」

○城山

夫れ達人は大觀す中かん拔山蓋世の勇あるも」切り榮枯は夢か幻か」大隅山の狩倉  
に眞如の月の影清く切り無念無想を觀すらん」大かん何を怒るか怒り猪の」俄かに  
激する數千騎勇みに勇む隼り雄の騎虎の勢一徹に留まりがたきぞ是非もなきたい身  
一つを打捨て、若殿輩に報なむくづれ」明治十年の秋の末諸手の軍は打ち破れ討ちつ  
討たれつやがて散る霜の紅葉の紅の血汐に染めどかへりみぬ薩摩武夫の雄たけびに  
打ち散る玉は板やうつ散たばしる如くにて而も向けん方ぞなき木だまに響く関の聲  
百の雷一時に落つるが如き有様を隆盛打ち見てほゝそ笑み」あな勇ましの人人や亥  
の年以來養ひし腕の力も試し見て心に殘ることはなしいざ諸共に塵の世を脱れ出で  
んはこの時とたゞ一言を名殘にて桐野村田を始めとし宗族の輩諸共に煙と消えしま

琵琶歌大鑑

すら雄の切り「心の内こそ勇々しけれ」官軍之を望み見て昨日迄は陸軍大將と仰がれ  
吟聲、君の寵遇世の覺へ比ひなかりし英雄も今日はあへなく岩崎の山下露と消へはて  
い移れば替る世の中の無常を深く感じつゝ無量の思胸に満ち唯悄然と隊伍を整へ目  
と目を見合す斗りなり折しもあれや吹下す切り「城山松の夕嵐」岩間にむすぶ谷水の  
無情の音も何となく悲鳴するかと聞なされ切り「衣服の袖を濡し候はん」

○辨の内侍

哀れや落花情あるも流水などか情なけん況んや中も吉野川はれて世に住む妹山や春  
山の嶺の月としもしばしいざろふ程もなくあかぬ別れの村時雨切り「くもりやすきぞ  
是非もをし」天野「茲に河内守左衛門尉楠正行は」中野「天下の安危を身一つに思ひあつ  
めて三吉野や吉野の宮に召され行く頃は正平の二年しはすの末の冬の空嵐にきそふ  
木の葉にも散たばちる玉笹の消ゆるを争ふ一族郎黨引具して急ぎささふる石川や何

に騒ぐか群千鳥鳴音亂るゝかなたより俄にといろく人馬の矢叫び敵か味方か伏勢か  
風に嘶く駒とめて山下道を見渡せば崩れ「電光石火切り結び落花狼籍泣き叫ぶ乙女の  
聲の魂きるは必定曲者いでだりないでや弱さをたすけやり強きをくじきくれんずど  
馬上の正行最先に刃をかざして切つて入る前より切りつ後より突き貫きつ無二無三  
當るを拂ひ逃るを追ひ縦横無盡なぎたてし掣電飛雷の早業の其勢ひはさながらに  
阿修羅王の荒れたる如く獸王獅子の狂へるに似たり吟聲野分の中の女郎花おもはぬ  
人に救はれて思ふ人とはなりにける其正行に守護されて吉野の宮に歸り行く辯の内  
侍の綾の袖濡るは露か露ならず悲喜ともくの涙なり」侍臣帝に奏すらく逆賊高の  
師直かねてしも思ひをかけし辨の内侍を奪ひとらんと企て、既に石川の邊まで軍卒  
あまた取囲み虎口あやふく見へけるをゆくりなくも正行が危難を救ひよゐらせて事  
なく歸館めされけり傳奏かくと聞しめし帝は御簾をかゝさせ給ひ汝正行なかりせば  
いとも口惜しからましをよくこそ助け候らへつれ内侍を正行に賜はんと詔して下さ  
れぬ何思ひけん正行は綸言いともかしてみて



とても世にながらふべくもあらぬ身のかりの契をいかでむすばん

と奏してころは辞しにける嗚呼あじきなの世の中や身はこれ右小辨俊基の忘れがた  
みの姫小松操の色は深みどり結び結ばる妹と脊の縁の糸の長かれと祈りし甲斐も水  
の泡消なば消ねの心かや時雨にこよき松さへも清き雪には色かゆる習ひもあるに君  
はるもたゝ仮初の契りぞと云ひ操てまし、御心のろこには深き故あらん問はぬもつ  
らし問ふもまた中呼「いと恥かし事になん」かくやとばかりとつをいつ辨の内侍は  
心から戀路の闇に踏まよい今一度の逢瀬をと跡を慕ひて行きみしにこはるもいかに  
正行を初め百四十三人の一族郎黨のかゝれとてしもなでざりし其黒髪を切すて、如  
意輪堂に奉納しさて正行が矢ちりもて塔の扉にとめたりし辞世の跡を讀み見れば  
かへらじと兼ておもへば梓弓なき數に入る名をぞとゞむる

こ扱は我夫正行君かゝる覺悟のまし／＼て仮の契りを結ばじと諭しまし、かるれど  
しも淺澤水のいと淺き女の心の悟りかねつれなき君と葛の葉の恨みし事は恥かしや  
此山寺の法の風今は迷を吹はらひ死なば未來は彼の國の一つ蓮の花の上大呼「各留半

座乘華臺」中呼「侍我閻浮同行人」短かさ仮の契をば長き誠の契りとも結びかへたるう  
れしさよ帝の御ため君のため我身もかくや返しせん

大君につかへまつるも今日よりはこゝろに染むる墨ぢめの袖

誠あらば心なき空ゆく雲もたゝよはん況んや正行木石にあらず今や決死の出陣に契  
らの妻の眞心をみにつまされて流石にも斷腸の思ひやるせなく不便の者よけなげな  
る我妻なれとそゝろにも切り「鎧の袖を濡しけり」

○錦の御旗

天照す日の影うつる眞名井の流れ水清く瑞穂の國は昔より武勇切り「忠義の人多し」  
大呼「元弘年中のころかとよ」後醍醐帝の三の皇子大塔宮と申せしは智勇備はれる君  
にして出家の身にはましませど父の御爲め國のため逆賊を討平らげんとの御企早く  
も賊へ洩れしかば比叡の奥にも南都にも身を置き給ふ事かたく熊野をさして落給ふ

琵琶歌大鑑

股肱の臣は誰々赤松律師光林坊木寺の相摸三河坊中片岡八郎武藏坊平賀の三郎矢田彦七村上義光の九人にて柿の衣に笈を負ひ頭巾眉深く被りて先達つくつて山伏の熊野詣に装ひたり龍樓鳳闕に人となり輕軒香車を出まさぬ雲上人の御歩の長途いかにと御供の人々危く思ひしに社々の御祈り宿々の御勤め露も怠り給ねば勤修をつめる山伏も見咎むる者更になし由良の港を見わたせば沖漕く船の楫をたへ浦の濱木綿幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥紀路の遠山渺々と薄紫の藤代の松にかゝれる磯の浪和歌吹上の浦かけて月に磨ける玉津島吟聲光をよりに伏拜み長汀曲浦の旅の路心を碎く習ひなり雨を含める孤郵の樹夕を送る遠寺の鐘哀を催す黄昏に切目の皇子に着き給ひ叢祠に袖を片敷て『朝家の榮を祈ります』斯く戸津川の戸野兵衛竹原八郎たよりて暫し居給へ爰にも長くありかねて高野の方へ落たもう茲に妹加瀬庄司とて賊に一味の士の宮をさへへて申様此道通し申なば鎌倉より罪せられんさは云へ宮に弓引く事いかにも畏れ多ければ錦の御旗賜はるか左なくば一人御供止めて證據にせんと云ひければ股肱の臣を一人だにかでか残し給ふべき詮方なくも御

琵琶歌大鑑

旗をば彼に興へて虎の口切り『僅に通れ給ひけり』斯るところに村上彦四郎義光は草鞋の緒や切れにけん遙に後れたりしかば頓て宮に追付申さんご足疾く過ぐる折しもあれハタト庄司に行逢へり家人が持てる旗見れば正しく錦の御旗なり不思議と思ひ尋ぬるに事云々と答けるを村上之を聞も敢ず大呼くわと怒りて打にらみ』こはるも如何に何事ぞ忝くも畏くも四海の主人に御座ます御天子の御子崩れ朝敵を追罰わらん其爲に御門出の道なるに汝等如き下郎輩かゝる振舞すべきかと持たる御旗を奪ひ取り大の男をかひつかんで四五丈ばかり投げたるは恰も獅子の荒たるに異ならず此怪力に恐れけん妹加瀬庄司一言も半句もなくすくみけり』義光は御旗を肩にかけ程なく宮に追付御前にひれふし事の由を具に申上しかば宮は斜に御喜び古の北宮勳が勇氣にも立まされりとめでましぬ義光は之のみならず吉野の奥の戦に宮に變りて打死す御旗に打たる月と日と光争ふ忠臣切り義士とたへて後の世も君に仕ふる人臣の鏡とこそは仰がるれ切り鏡とこそは仰がるれ一

259  
177

明治四十二年三月二十三日印刷  
明治四十二年三月二十六日發行

東京市神田區鍛冶町十一番地

發行者 小西乙吉

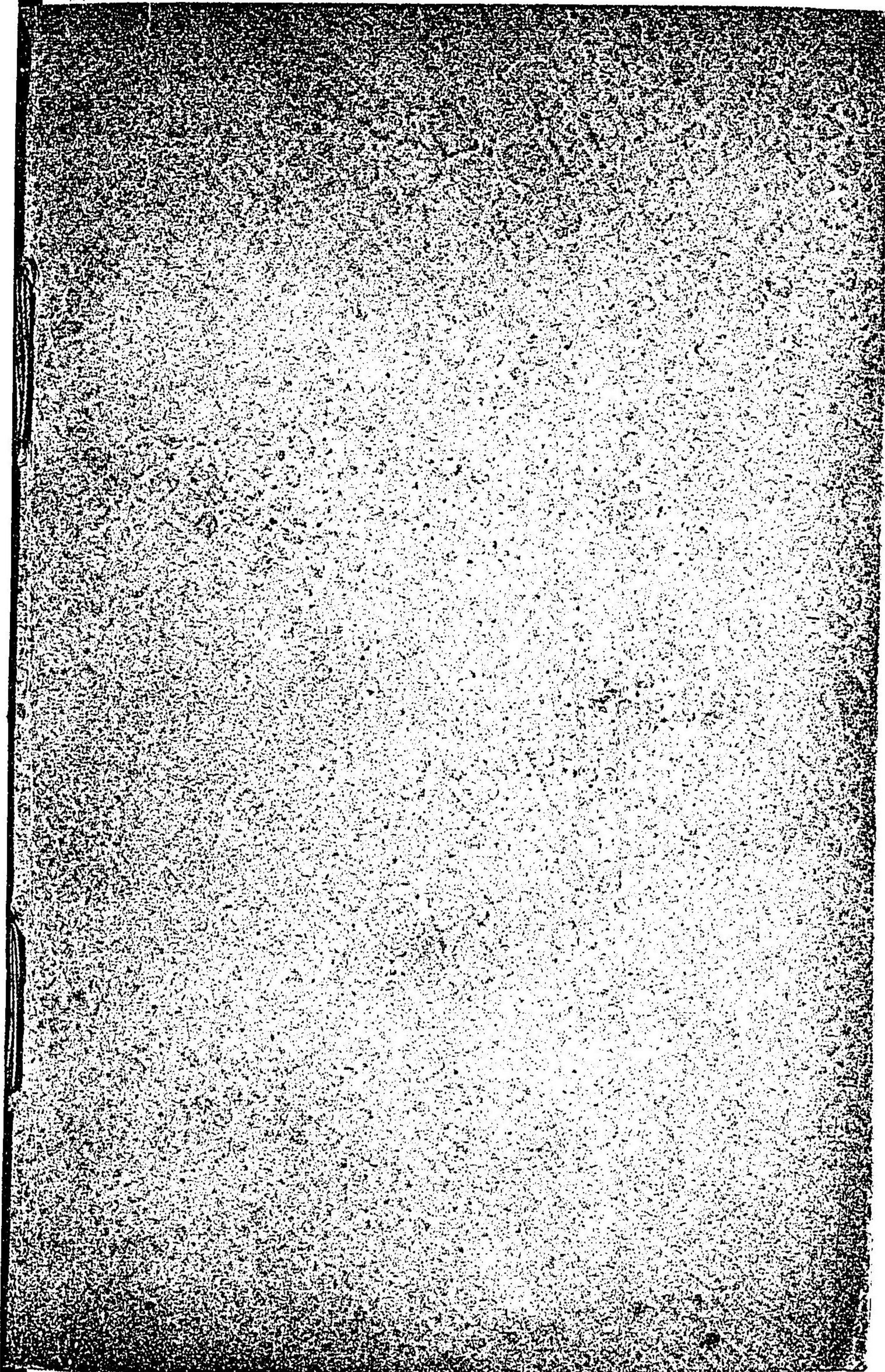
東京市神田區鑿大工町九番地

印刷者 茂木兼太郎

同所

印刷所 三八光商會活版部

發行所 東京市神田區鍛冶町十一番地 三八光商會出版部



特44

261

074725-000-9

特44-261

琵琶歌大鑑

三八光商会出版部

M42

CEJ-0321



259

177